

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 222 回 吾唯足知（われただたるをしる）

2007.10.7

人間には欲望がある。食欲、性欲、睡眠等は生理的・動物的欲望、名誉欲、出世欲、拡大欲等々欲望にはキリがない。欲望の根源は「現状に満足しない、今より一步前進」という向上心の表れと言っていかもしれない。これが原則的なパワーとなっており、成長、発展を支える源泉になっているのだろう。もし欲望がなくなったら、名実共に「年寄り」であり、人生の終焉に近づいたと、多に悲しむべきかもしれない。

しかし、欲望は、ややもすれば厄介な側面を露呈する。

というのは、欲望を満たすことに快感を覚えた場合、際限なく膨らむ欲望を抑えることができなくなるということに他ならない。これを理性的にコントロールできる動物が、唯一「人間」と言われてきたが、どうも、そんなことないようである。アフリカの野生のライオンは、周りにどんな美味しい餌があろうと、満腹時には食べようとしない。頃合いを知る小動物は、平気でライオンの周辺をうろつき回る。生理的欲望を見事にコントロールしている証拠であろう。

最近どうも、このライオンにも劣る人間が横行している。いや実は、この手の人間、昔から存在していたのかもしれない。拡大路線を曲げず、周囲が見えなくなって破綻に追い込まれたスーパーマーケットの雄、福祉・介護事業を儲けのネタにし、社会的制裁を受けた訳が分からん実業家、「儲ける事が罪ですか」と大見得を切り響^{ひんしゆく}感をかった愚かな小役人経営者、M&A を繰り返しまネーゲームを楽しむ成金青年経営者もどき、なんとも欲望を抑えきれない、哀れな連中は、枚挙に遑^{いとま}がない。

石庭で有名な名刹・京都の「龍安寺」。そのつくばいには「吾唯足知（われただたるをしる）」と刻まれている。「足るを知る者は貧しいといえども心は富んでいる、足るを知らぬ者は富めりといえども心は貧しい」という意味で、欲望を自制し、分をわきまえることの大切さを説いている。

表現語としてはいささか問題だが…、「貧乏」とは何も持っていない人のことでなく、多くを持ちながら、まだまだ欲しい欲しいと満足できない人のことであると思っている。前述した連中のほとんどが、庶民の我々が一生かけても実現できないほどの、贅沢極まる生活をしていたはずである。

もし、足る事を知る人は、不平不満が無く、心豊かであることが出来るであろう。足るを知ることは、欲望が制御され、煩惱妄想による迷いもおのずと消え、心清き状態でいられると言うことになる。

これからの経営者に求められることは、まず、己を知ることである。自分の会社の状況を客観的に認知し、将来を冷静に見極める能力である。やたら無理・無駄な売上拡大策に邁進することなく、「適正なる利潤」を目指し、そこに満足する価値観を醸成すべきである。正に「吾唯足知」の思想の実践が求められている。